



歳時記のある暮らし

二〇二〇年《十二月》

北風が木々の葉を払い落とす師走のころとなりました。

皆様、おすこやかに過ごしてでしょうか。

いつも『神秘の健康力』をご愛用いただき、誠にありがとうございます。

光陰矢の如しといいますが、暑くて長い夏が過ぎ、快適な秋はあつという間に終わりの瀬を迎えました。今年を振り返ると、二〇一九年十二月に中国湖北省武漢で発生した新型コロナウイルス感染症が世界に蔓延して文明社会に暗い影を落としました。あたりまえの日常が一変して暮らしがわりました。寒しみが奪われ不自由を強いられましたが、一方では何かに追われ忙しく、常に「時短」を求めてきた生活も変化しました。

今年はコロナ禍が生じた時間の中で、いつ、何をやるのかを自分で決めるようになりました。忙しいという字、忘れるという字は、心を亡くすと書きますが、今年は忙しくて忘れていたものを取り戻すことができましたという意味では意義があつたと考えられることもできます。締めくくりの師走、行事やしきたりについて思いを馳せ、丁寧に暮らすことも素敵なことです。

十二月八日と二月八日を「事八日(ことようか)」といい、お正月の神事を意味します。事八日には「針供養」が行われます。古くなった針や、折れ曲がった針、錆びた針などを神社に納めて供養します。硬い布をくぐり続け役目を終えた針を労い感謝して、芥子かきこんやくや豆腐で休んでくださいという気持ちをもって刺して拝みます。道具にも労いの気持ちを示す美しい心の風習です。

十三日は、歳神様のお迎えの準備を始める事始めです。歳神様は稲の穂の総りを約束する神様で、古代日本で農耕が発達するにつれ、年の始めに豊作を祈るようになり、正月の中心行事となりました。事始めから煤払いや餅つきなどを始めます。門松は歳神様の依代であり、鏡餅はお供え物です。新しい年の生きる糧を与えてくださる神様をお迎えできることはありがたいことです。

お歳暮の手配が済み、御用納めの目途が立ち、新年の準備や年賀状の作業もひと段落するころ冬至を迎えます。冬至は昼の時間が最も短い日。太陽の高さが最も低く力が一番弱まる日ですが、この日を境に次の日から再び力が甦ってきます。そのため冬至を境に運が

(裏へ続きます)

向いてくるとされ、「一陽来復(いちようらいふく)」という言葉が生まれました。この言葉は転じて悪いことが続いた後に幸運に向かうこと、冬が終わり春が訪れることを意味するようになりました。冬至に柚子湯に入ると風邪を引かないといわれます。柚子の香りは邪気を祓うという考えもあることから、端午の節句の菖蒲湯同様、旬の香りの強いもので邪気を祓う儀式ともいえます。柚子には身体を温める効果もあるので、柑橘系の心地よい香りを楽しみながらゆくりリラックスして柚子湯に浸かり今年の疲れを解消しましょう。

冬至には、かぼちゃを食べる風習もあります。冬至に「ん」のつくものを食べると「運が呼び込める」といわれ、南瓜(なんきん)、人参、大根、蓮根など、「ん」のつくものが「運盛り」といわれます。とくに南瓜は本来夏が旬、南からやってきたものであるため、「夏」「南」と陽の気を多く含むものとして、好んで冬至に食べられるようになったようです。ほかに、邪気を祓うといわれる小豆の入った冬至粥も食されます。これらの行事食は縁起かつぎの意味合いだけでなく、寒い冬を元気に過ごすための栄養食ともなります。

クリスマスが訪れると、あと数日で今年ともお別れです。やるべきことをやり終えて心が落ち着き、神聖な気持ちになるころです。

八人の子供むつまじクリスマス

三十五歳でこの世を去った正岡子規が、病床に伏した二十九歳の時に詠んだ句です。子規には子供がいまいませんでしたが、子供の多い賑やかなクリスマスの様子は家庭の幸せの象徴にうつり、クリスマスという西欧の習慣に家庭的な喜びを直感したのでしょうか。子規は、日本で初めてクリスマスを詠んだ歌人といわれています。

今年には新型コロナウイルスという未知の病に脅かされましたが、皆様とともにこの大変な時期を乗り越えてこられたことは大きな喜びです。まだまだ油断はできませんが、普段から自分の健康は自分で守り予防対策に万全を期しましょう。

皆様のご健康と、一日も早い新型コロナウイルス感染症の終息を願っております。

今年一年『歳時記のある暮らし』をお読みいただきありがとうございます。ありがとうございました。皆様、どうぞ良いお年をお迎えください。

金氏高麗人参株式会社

おもてなし係 お手紙担当 久郷直子

